

「徐州刺史杜嗣先墓誌」雑感

伊 藤 宏 明

はじめに

最近、高橋継男氏の論文「最古の『日本』－『杜嗣先墓誌』の紹介」⁽¹⁾を読んで、興味をそそられた。この論文は、高橋氏が、最近発見された「井真成墓誌」に記された「日本」という国号が現存最古のものであると注目されたことに対して、それよりも古く「日本」の国号を記した「徐州刺史杜嗣先墓誌」があるとして紹介したものである。しかし、筆者はこの指摘に興味をいだいたのではなく、墓主である杜嗣先自身にである。というのは、那波利貞氏や礪波護氏の両論文⁽²⁾で既に紹介された五代期の通俗童蒙書『兔園策府』の著者として頭のかたすみに残っていたからである。もう一点は如何なる人物かが全く知られていなかったからである。そうした人物の墓誌が発見されたことへの驚きと疑念が走った。

高橋氏によれば、この墓誌史料を最初に紹介されたのが葉国良氏であるという⁽³⁾。早速、葉氏の論文を取り寄せ、目を通してみた。葉氏による杜嗣先墓誌分析の結論は以下の5点に整理できる。

1. 墓誌の信頼性を確認するために、墓誌中に出てくる杜嗣先の先祖10名の内の杜預からはじまって7代の遇までの人物7名を『魏書』、『北史』、『新唐書』、『元和姓纂』を使って跡づけ、その一致を確認している。
2. 墓誌中に現れている杜嗣先と官界で関係のあった人物12名を『旧唐書』、『新唐書』を使って確認作業を行い、内11名が正史と符合していることを指摘している。しかし高若思という人物だけが正史で発見できず、『全唐文』巻156の小伝のみで「太宗の時の人」と確認できるが、ここに登場する人物は高宗時代の人であることから、時期が一致しないと

しながらも、墓誌に現れる孟利貞や郭正一と同時期に文学で賞賛された高智周がその人物ではないかと推定している。

3. 墓誌中に、雍王（章懐太子李賢を指す）記室参軍であった杜嗣先が侍読劉訥言、功曹章承慶と『後漢書』に注釈をつける作業に加わっていることが記されていることから、従来の『後漢書』の注釈作業は、章懐太子李賢が中心となって、太子左庶子張大安、洗馬劉訥言、洛州司戸格希元、学士許叔牙・成玄一・史蔵諸・周宝寧らが行ったことが正史によって知られていたが、これ以外に、この墓誌によって作業の担い手として杜嗣先と章承慶を加えることができるとしている。
4. 墓誌の中に、日本の使者が来朝した際に、勅命によって杜嗣先が李懷遠・豆盧欽望・祝欽明らと蕃使（遣唐使）を賓客の礼でもてなし、共に語り合ったという記事が載っていることから、この墓誌に登場してくる人物の事跡を、正史を使って検証した結果、この出来事は長安2年（702）のことで、この蕃使は粟田朝臣真人であるとしている。
5. 従来の研究では『兔園策府』の制作年を、羅振玉が貞観年間説⁽⁴⁾、郭長城が永徽3年（652）前後説⁽⁵⁾としているが、葉氏はこの墓誌史料によって杜嗣先の生没年を確定して、この両者の制作年では杜嗣先の年齢が16歳から19歳の頃で制作に関わるには若すぎるとして批判し、杜嗣先が蔣王の補佐役であった時期を顕慶三年（658）の就任から麟徳元年（664）の昭文館学士転出までとし、『兔園策府』の制作時期を25歳から31歳の間であるとしている。

葉氏の見解は以上であるが、少々疑問点もあるので、改めて自分なりに検証して、私見を述べてみたい。

一 杜嗣先の一族

葉氏や高橋氏が既に墓誌に記載された杜嗣先一族の家系について検証済みであるが、この章では杜氏一族の家系について改めて正史などの史料を使っ

て検証してみることにする。まず両氏の指摘を参考にしながら、墓誌史料と正史などの史料をもとに表1「杜嗣先一族」を作成し、杜氏一族の特徴をみてみたい。

表1 杜嗣先一族

番号	人名	関係事項	典拠
1	杜預	晋の鎮南大將軍・当陽侯。	墓誌 ⁽⁶⁾
		字は元凱。晋の荊州刺史・征南大將軍（魏書45では征南將軍と記す）・当陽侯。四子。錫・躋・耽・尹。	新唐書72上
2	杜躋	新平太守。	墓誌
		思陽侯（思は当の誤り）の少子。新平太守。	元和姓纂6
3	杜胄	南陽太守。	墓誌
		曹（胄の誤り）。苻秦の太尉。	元和姓纂6
		苻堅（前秦）の太尉長史。	魏書45杜銓伝 北史26同伝
4	杜嶷	燕郡太守。	墓誌
		秦（後燕の誤り）の秘書監	元和姓纂6
		慕容垂の秘書監。趙郡に僑居。	魏書45杜銓伝 北史26同伝
5	杜銓	中書侍郎・新豊侯。	墓誌
		字は士衡。京兆の人。北魏の中書博士。散騎侍郎。中書侍郎。新豊侯。贈平南將軍・相州刺史・魏県侯。	魏書45杜銓伝 北史26同伝
6	杜振	中書博士。	墓誌
		字は季元。北魏太和（477-99）初め、秀才に挙げられる。中書博士。	魏書45杜銓伝 北史26同伝
7	杜遇	高祖。字は慶期。魏の龍驤將軍・豫州刺史・恵公。預の6代孫。偃師に居住。	墓誌
		字は慶期。奉朝請で起家。員外散騎侍郎。尚書起部郎中。龍驤將軍。中散大夫。河東太守。贈中軍將軍・都官尚書・豫州刺史。	魏書45杜銓伝 北史26同伝

8	杜琳	曾祖。周の新城太守。	墓誌
9	杜歆	祖。隋の朝散大夫・行昌安県令。	墓誌
10	杜業	考。唐の滑州長史。	墓誌
11	杜嗣先	京兆の人。蔣王典籤。昭文館直学士。太子左衛率府倉曹参軍。国子監主簿。雍王記室参軍。太子文学。太子舍人。鄆州鉅野県令。幽州薊県令。汝州司馬。蘇州呉県令。朝散大夫。簡州刺史。太子洗馬・昭文館学士。給事中。礼部侍郎。徐州刺史。	墓誌
		唐の礼部侍郎(杜)嗣光(光は先の誤りか) ⁽⁷⁾ 。孫の湊之、兵部郎中で、長文を生む。偃師の杜氏。	元和姓纂6
12	杜維驥	子。貝州司兵。	墓誌

() 内は筆者の注。

上記の表1から以下のことが理解できる。まず墓誌史料と正史などの史料を比較してみると、杜預から遇まで7代の家系に関して両者が一致していること、またこの間の杜氏一族の官職に関しても3例ではあるが、杜銓の中書侍郎、杜振の中書博士、杜遇の龍驤將軍に両者の一致がみられること、また杜嗣先の場合は『元和姓纂』巻6に書かれた「礼部侍郎」と墓誌のそれとの一致がみられることがわかる。

墓誌史料を信頼するとすれば、この杜嗣先一族は杜預から始まり、その彼は周知のように現存最古の『春秋左氏伝』の注釈書である『春秋左氏経伝集解』を撰した西晋の学者であり、また杜嗣先をはじめ杜氏一族の任官した官職を見ると、杜氏一族は、学問を以て仕官した家柄であったことがわかる。

また杜嗣先自身も、墓誌史料によれば、章懐太子李賢に仕えて『後漢書』の注釈作業に関わったこと、また『兔園策府』を著したこと、昭文館直学士・国子監主簿・太子文学・昭文館学士・礼部侍郎などの官職を歴任していることから、学問に優れた人物であったことがいえよう。ただ同僚であった孟利貞・郭正一・劉訥言(後述)のように『旧唐書』や『新唐書』の文苑伝や儒学伝に記載されるほどの逸材ではなかったし、杜嗣先とともに『後漢書』

の注釈に関わった韋承慶（後述）のように列伝に記載されるような家柄ではなかったようである。

以上のことから、杜嗣先の一族は西晋・前秦・後燕・北魏・北周・隋・唐と北朝系の王朝に学問をもって仕えた中級文官の家柄であったと考えられる。

二 墓誌に登場する官僚たち

この章では、杜嗣先墓誌に登場する人物についても墓誌史料と正史等を比較して表2「墓誌に登場する官僚たち」を作成し、その人物について考えてみたい。

表2 墓誌に登場する官僚たち

番号	人名	年月	西暦	履歴	典拠
1	竇徳玄	麟徳元年	664	河南道大使・左相	墓誌
		龍朔元年	661	持節大使	旧唐書4・高宗本紀上
		麟徳元年	664	檢校左相（門下侍中）	同上
2	高若思			学士	墓誌
				弘文館学士	旧唐書191・方伎伝・僧玄奘の条
3	孟利貞			学士	墓誌
		龍朔2年	662	著作郎。弘文館学士	旧唐書190上・文苑上・孟利貞の条
4	劉禕之			学士	墓誌
				孟利貞らと昭文館に直す。上元中（674-5）、左史（起居郎）・弘文館直学士に遷る。	旧唐書87・劉禕之の条

5	郭正一			学士	墓誌
				貞観中の進士。中書舎人・弘文館 学士	旧唐書190 中・文苑中・ 郭正一の条
6	劉訥言			侍読	墓誌
		儀鳳元年	676	太子洗馬兼侍読	新唐書198・ 儒学上・劉 訥言の条, 旧唐書86・ 高宗諸子・ 章懐太子賢 の条
		調露2年	680	太子が廃位された後, 民に落とさ れ, 振州で流死。	新唐書198・ 儒学上・ 劉訥言の条
7	韋承慶			功曹	墓誌
				進士及第。雍王府参軍。後に太子 司議郎に遷る。	旧唐書88・韋 思謙の子・ 承慶の条
		調露初め	680	東宮が廃位されて後, 烏程県令に 出される。	同上
		龍朔二年	662	太学進士	大唐故黄門侍 郎兼修国史贈 礼部尚書上柱 国扶陽県開国 子韋府君墓誌 銘并序 ⁽⁸⁾
		龍朔三年	663	雍王府参軍 ⁽⁹⁾	同上
				(雍)王府功曹参軍	同上
				例に随い, 湖州烏程県令を授けら れる	同上
8	李懷遠			官職の記載無し。	墓誌
		長安元年2月	701	鸞臺侍郎。同鳳閣鸞臺平章事	旧唐書6・則 天武后本紀

		長安元年7月	701	秋官（刑部）尚書。	新唐書61・ 表1・宰相上
		長安4年	704	太子左庶子。太子賓客。	旧唐書90・ 李懷遠の条
		神龍元年4月	705	左散騎常侍・中書門下三品	旧唐書90・ 李懷遠の条
9	豆盧欽望			官職の記載無し。	墓誌
		聖曆2年8月	699	文昌右相・同鳳閣鸞臺三品	旧唐書6・則 天武后本紀
		久視元年2月	700	太子賓客	新唐書61・ 表1・宰相上
		神龍元年 5月・6月	705	尚書左僕射。軍国重事・中書門下 可共平事。	旧唐書7・ 中宗本紀
10	祝欽明			官職の記載無し。	墓誌
		長安元年	701	太子率更令・崇文館学士。	旧唐書189 下・儒学下・ 祝欽明の条
		長安2年	701	太子少保	旧唐書189 下・儒学下・ 祝欽明の条
		神龍元年2月	705	国子祭酒・同中書門下三品	旧唐書7・ 中宗本紀

() 内は筆者の注。

上記の表2の分析によって以下のことがわかる。

1. 墓誌史料に登場してくる番号1から7までの官僚たちの官職を『旧唐書』・『新唐書』のそれと比べてみると、例えば番号1の竇徳玄の場合には官職名と任官年が一致している。
2. 番号2の高若思から番号5の郭正一までの4名の場合は墓誌史料では官職名が「学士」と記されているが、彼らが、両唐書の本紀・列伝によって、杜嗣先と同時期（660～670年代）に「弘文館学士」あるいは「弘文館直学士」であったことが確認できる。

3. 番号6の劉訥言と番号7の韋承慶^{補(1)}の場合も墓誌史料では「侍読」と「功曹」と官職名が記されているが、この2名の官職名が兩唐書本紀・列伝及び「韋府君墓誌銘」によって「太子洗馬兼侍読」と「(雍)王府功曹參軍」であったことが確認でき、また劉訥言が任官した年が儀鳳元年(676)であったことと、韋承慶の「王府功曹參軍」に任官したのが龍朔3年(663)から調露元年(679)の間の時期であったことがわかり、彼らも杜嗣先と同時期に活躍していたことが確認できる。
4. 墓誌史料に「永崇(隆)元年(680), 官僚の故事を以て, 出でて鄆州鉅野県令と為り, 又た幽州薊県令に除せらる」⁽¹⁰⁾とあるように、杜嗣先は680年に官僚制の慣例により鄆州鉅野県令に転出したと記しているが、同じ年に同僚であった劉訥言は皇太子李賢が廃位された際に振州で流死し、一方、韋承慶は湖州烏程県令に出されていることが兩唐書に記されていることから考えて、この人事異動が左遷であったことがわかり、この当時、李賢に関係していた官僚の肅清があったものと考えられる。
5. 葉氏は、高若思という人物だけが正史で発見できず、墓誌に現れる孟利貞や郭正一と同時期に文学で賞賛された高智周がその人物ではないかと推定していることを先に述べたが、しかし筆者が調べたところによると、高若思という人物は⁽¹¹⁾,

顯慶元年、高宗、又た左僕射于志寧、侍中許敬宗、中書令来濟・李義府・杜正倫、黄門侍郎薛元超らをして共に玄奘の定むる所の經を潤色せしめ、国子博士范義碩、太子洗馬郭瑜、弘文館学士高若思らをして助けて翻譯を加えしむ（『旧唐書』卷191・方伎伝・僧玄奘の条）とあるように、『旧唐書』にその名前と弘文館学士の官職名を確認でき、かつ高宗顯慶元年(656)に玄奘が定めた經典を翻譯していることがわかり、彼とともにこの事業に携わった学者として黄門侍郎薛元超、国子博士范義碩、太子洗馬郭瑜がいたことも知ることができる。またこの内、薛元超は、

明年(永徽六年・655), 黄門侍郎を起授せられ、檢校太子左庶子

を兼ねしむ。元超、既に文辞を擅にし、兼ねて寒俊を引くを好む。嘗て任希古・高智周・郭正一・王義方・孟利貞等十余人を表薦す。是より時論、美と称う（『旧唐書』卷73・薛収伝・子の元超の条）

とあるように、高智周・孟利貞・郭正一らの推挙者であることが確認でき、郭瑜の方は、『新唐書』卷59・志第49・芸文3・丙部子類・類書類に、

許敬宗 搖(瑤の誤り)⁽¹²⁾ 山玉彩五百卷 孝敬皇帝,太子少師許敬宗,司議郎孟利貞,崇賢館学士郭瑜・顧胤,右史董思恭らをして撰せしむとあり,同卷60・志第50・芸文4・丁部集録・總集類に

芳林要覽三百卷 許敬宗,顧胤,許圜師,上官儀,楊思儉,孟利貞,姚璿,竇德玄,郭瑜,董思恭,元思敬,集す。

とあるように、杜嗣先と関わりを持っていた人物である孟利貞・竇德玄と二つの編纂事業—『瑤山玉彩』（龍朔3年に完成）⁽¹³⁾と『芳林要覽』に従事していたことが確認できる。以上のことから、高若思が黄門侍郎薛元超や太子洗馬郭瑜と関わりがあったこと、薛元超が高智周・孟利貞・郭正一らの推薦者であったこと、郭瑜が編纂事業を通して孟利貞や竇德玄と繋がりがあったことがわかり、これらの点を考えると、葉氏が推定されたように、高若思と高智周が同一人物である可能性は高いように思われるが、しかし同一人物であるかそうでないかを確定するにはまだ決め手を欠くように思われる。

6. 最後に長安2年(702)の日本使節に面談した李懷遠、豆盧欽望、祝欽明について述べることにする。墓誌史料では彼らの官職が記されていなかったが、この時期の彼らの官職を見ると、李懷遠が長安元年に秋官尚書となり、長安4年には老いを以て秋官尚書の職を解かれて太子左庶子となっており、豆盧欽望が官界を引退する間際の久視元年に太子賓客の職に就いており、祝欽明は儒学者として中宗の皇太子時代にその側近として働き、長安2年に太子少保となっていることが確認できる。このことから考えて、日本の使節に対応したのは、官僚としての輝かしい実績はあるが停年を迎えた老官や太子の側近官であったと思われる。ただ

後に3人が神龍元年に中書門下三品、中書門下可共平事など宰相の職に急ぎよ復歸したのはこの年中宗が則天武后に代わって即位したためと思われる。老骨にむち打って唐朝を立て直すための任官であったのであろう。

以上、6つの点について論じたが、この章のまとめをすることにする。まず杜嗣先墓誌の記述が正史及び韋承慶の墓誌のそれとほぼ一致することから、杜嗣先墓誌の記述の信頼性が高いことがわかる。また杜嗣先が20代から30代にかけて蔣王や章懐太子李賢に仕えて編纂事業に携わっていた時期（後述）に関わりのあった官僚たちも弘文館学士あるいは弘文館直学士として文史編纂に活躍していたことがわかる。

三 兔園策府

この章では、まず墓誌から杜嗣先の年譜を作成してその経歴を確認した上で、彼の著作である『兔園策府』について触れてみたい。

表3 杜嗣先年譜

皇帝	年月日	西暦	年齢	履歴	備考
太宗	貞観8年	634	1	生まれる	
高宗	永徽2年	651	18	本州で孝廉に挙げられる	
	顯慶3年	658	25	蔣王典籤	蔣王は太宗の第7子・李暉。蔣王であったのは貞観10年から上元2年まで(旧唐書3・5)
	麟徳元年	664	31	昭文館学士	
				太子左衛率府倉曹参軍	太子は高宗の第5子・李弘
				国子監主簿	
	咸亨元年	670	37	沛王(李賢)に参侍	沛王は高宗の第6子・李賢。沛王であったのは龍朔元年から咸亨3年まで(旧唐書4・5)
				雍王(李賢)記室参軍	沛王から雍王に改封。雍王であったのは咸亨3年から上元2年まで(旧唐書5)

	上元2年	675	42	太子文学・太子舍人	李賢, 皇太子となる (旧唐書5)
	永隆元年	680	47	鄆州鉅野県令 (左遷)	李賢, 庶人に落とされる (旧唐書5)
				幽州薊県令	
				汝州司馬	
	長壽2年	693	60	蘇州呉県令・朝散大夫	
				簡州刺史	
				太子洗馬・昭文館学士 (中央官界に復帰)	
				給事中・昭文館学士	
				礼部侍郎・昭文館学士	
武后	長安2年	702	69	遣唐使と面談	
中宗	神龍元年	705	72	徐州刺史	
				退官	
玄宗	先天元年9月6日	712	79	亡くなる	

(この表は高橋継男氏の前掲論文に掲載されている表「杜嗣先の官歴」を参考に作成)

上記の年譜からわかるように、杜嗣先は学問をもって唐朝に仕えたが、皇太子李賢廢位による肅清にあつて、出世の路を絶たれ、官職も主に五・六品官に留まっている⁽¹⁴⁾。こうした経歴の中で、彼が最も精力的に活躍したのが20代・30代の頃であつたと考えられる。この時期に『兔園策府』は書かれたのである。

となると、『兔園策府』の出来栄えに関しては従来から幼稚な通俗童蒙書といわれているが、杜嗣先の学才はそれほどのものかということになる。しかし『兔園策府』に関する評価については、礪波護氏がその著書『馮道』⁽¹⁵⁾の中で、

『兔園策府』の原形をもっとも忠実に伝えるのは、スタイン一〇八六号なのである。これは、先の『北夢瑣言』および『困学紀聞』の解説と寸分たがわぬ内容を示している。問(質問)と対(解答)からなる駢儷

体の本文と、経史の典拠を示した双行の注釈からなりたっていて、本来は単なる通俗童蒙書でなかったことがわかる

と述べている。また礪波氏が引用されている『北夢瑣言』巻19「詼諧所累」に

兔園冊は乃ち徐 [陵]・庾 [信] 文体にして、鄙朴の談に非ず。但だ家ごとに一本を蔵す。人、多く之を賤しむ

と記し、また『困学紀聞』巻14には

兔園策府三十卷。唐蒋王恽，僚佐杜嗣先をして科目に応ずるの策に倣い，自ら問对を設け，経史を引きて訓注と為さしむ

と記されているように、この書籍は、南朝の徐陵・庾信の華麗精密な美文にならない、問答形式の科挙の模擬試験問題をつくり、それに経史の典拠を示した注釈をつけたものである^{補(2)}。こうした内容を持った著作であるということを見ると、杜嗣先は経史の学才に溢れていたからこそ、蒋王の命を受けてこの作品を完成させたものと思われる。この杜嗣先墓誌の発見によって彼の経歴が明らかになったことで、『兔園策府』がすぐれた作品であったことが追認できる。こうした作品が幾人者の手を経て書き写される過程で、新たに児童教育の教科書として生まれかわっていったのではなかろうか。

また『兔園策府』について、墓誌には「其所撰兔園策府及雜文筆，合廿卷」と記されている。すなわち『兔園策府』と雜文筆合わせて20巻であったことがわかる。では墓誌以外の史料ではどのように記されてきたのかを表にしてみると、以下の表のようになる。

表4 兔園策府

書名	著者名	巻数	典拠
兔園策府及び雜文筆	杜嗣先	20	墓誌
兔園策府	杜嗣先	30	困学紀聞14
兔園策	虞世南	10	郡齋読書志14・類書類
兔園策		9	日本国見在書目録・惣家集
兔園策	杜嗣先	10	宋史 208・芸文志・集類・別集類
兔園策府	杜嗣先	30	同上 集類・文史類

上記の表から、墓誌の記述が確かなものであると仮定するならば、著者は杜嗣先、巻数は、墓誌が雑文筆を合わせて20巻と記していることから、『困学紀聞』・『宋史』芸文志・別集類の記す10巻が一番近いようにと思われる。

以上のことから、若い頃から経史が得意で、文章に長けていた⁽¹⁶⁾杜嗣先が編纂した『兔園策府』はおそらく10巻からなり、問答形式の駢儷体の本文と、経史の典拠を示した注釈文から構成されていたと考えられる。

おわりに

最後に本稿のまとめをして、筆を置くことにする。

杜嗣先の一族は西晋・前秦・後燕・北魏・北周・隋・唐と北朝系の王朝に学問をもって仕えた中級文官の家柄であり、彼自身も同様に唐朝に仕えた。特に杜嗣先が20代から30代にかけて蔣王や章懐太子李賢に仕えて編纂事業に携わっていた時期が彼の一番充実した時代であった。それが皇太子李賢の廃位によって粛清され、中央を追われたのである。

『兔園策府』は彼の充実した時代に書かれたものであり、単なる児童教育の教科書ではなく、問答形式の華麗精密な美文の本文と、経史の典拠を示した注釈からなる確かな著作^{補(3)}であった。この著作ができたのは彼の学者としての力量があったからであろう。

最後に彼の伝記史料が残らなかったことについて触れておきたい。彼が20代30代に諸王・皇太子のもとで学者として編纂事業に活躍したが、廃位事件で粛清され、結局中級の官僚のままで生涯を終わり、劉訥言や韋承慶ほど才能も家柄も恵まれなかったがために正史に記されなかったのではなかろうかと考える。

註

- (1) 高橋継男氏の論文は専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使から見た中国と日本—新発見『井真成墓誌』からなにがわかるか』(朝日選書780 朝日新聞社 2005年)に収録されている。

- (2) 那波利貞著「隋唐五代社会史」(支那地理歴史大系刊行会編『支那社会史』所収 白揚社 1941年), 礪波護著『馮道』(中国人物叢書6 新人物往来社 1966年)を参照。
- (3) 「徐州刺史杜嗣先墓誌」は葉国良「唐代墓誌考釈八則」(臺大中文学報第7期 1995年)に紹介されている。葉氏によると, 「徐州刺史杜嗣先墓誌」は子供の杜維驥の撰で, 序はあるが, 銘はなく, 1991年に台北の骨董店で実物をみて書き写したもののようである。墓誌の録文は28行, 1行28字からなる。以下, 録文を紹介しておく。なお訓点に関しては高橋継男氏のものを参考にさせていただいた。

公, 諱嗣先, 京兆人也。高祖, 魏龍驤將軍・豫州刺史・惠公, 諱遇, 字慶期, 晋鎮南大將軍・當陽侯, 預之六代孫。預生新平太守躋。躋生南陽太守冑。冑生燕郡太守嶷。嶷生中書侍郎・新豐侯銓。銓生中書博士振。振生遇。有賜田于洛邑, 子孫因家于河南之偃師焉, 凡四代矣。曾祖, 周新城太守琳。祖, 隨朝散大夫・行昌安県令歆。考, 皇朝滑州長史業。公, 少好經史, 兼属文筆, 心無偽飾, 口不二言。由是鄉閭重之, 知友親之。年十八, 本州察孝廉。明慶三年, 積褐蔣王府典籤。麟德元年, 河南道大使・左相竇公, 旌節星移, 州郡風靡。出轅轅之路, 入許潁之郊。官僚之中, 特加礼接。時即表薦, 馳馭就徵。遂於合璧宮引見, 制試乾元殿。頌即降 恩旨, 授昭文館直学士。借馬弄人, 仍於洛城門待 制。尋授太子左率府倉曹參軍, 又除国子監主簿。□入芳林門内, 與学士高若思・孟利貞・劉禕之・郭正一等供奉。咸亨元年, 鑿輿順動, 避暑幽岐, 沛王以 天人之姿, 留守監国。遂降 敕日, 駕幸九成宮。□令学士劉禕之・杜嗣先於沛王賢処參侍言論。尋授雍王記室參軍。與侍讀劉訥言・功曹韋承慶等參注後漢。上元二年, 藩邸昇儲, 元良貞国。又遷太子文学, 兼撰太子舍人。永崇元年, 以官僚故事, 出為鄆州鉅野県令, 又除幽州薊県令。還私後, 除汝州司馬, 又除蘇州吳県令。尋加朝散大夫, 簡州長史入計。又除太子洗馬・昭文館学士。又遷給事中・礼部侍郎。以前数官, 咸帶学士。其所撰兔園策府及雜文筆, 合廿卷, 見行于時。每至朝儀有事, 礼申大祀, 或郊丘展報, 或 陵廟肅誠上帝宗於明堂, 法駕移於京邑。元正献寿, 南至履長, 朝日迎於青郊, 神州奠於黑座。公, 凡一撰太尉, 三撰司寇, 重主司空, 再入門下。或献替於常侍, 或警衛於參軍, 典礼經於太常, 修凶書於大象。又属 皇明, 遠被, 日本, 来庭。有 敕, 令公與李懷遠・豆盧欽望・祝欽明等賓于蕃使, 共其語話。至神龍元年, 又除徐州刺史。預陪祔 廟, 恩及追尊, 贈公皇考滑州長史。公, 於是從心自逸, 式就懸車。立身揚名, 其德, 備矣。歲舟變壑, 帰居奄及。粵以先天元年九月六日薨于列祖旧墟・偃師之別第。春秋七十有九。以二年二月二日, 與夫人鄭氏祔葬于洛都故城東北・首陽原當陽侯塋下。礼。孤子貝州司兵維驥, 失其孝養, 痛, 貫骨髓, 伏念 遺訓, 實録誌云。

- (4) 羅振玉「兔園策府」(鳴沙石室佚書目錄提要)(同編纂『鳴沙石室佚書正統編』北京図書館出版社 2004年)を参照。

- (5) 郭長城『敦煌写本免園策府研究』（中国文化大学中文研究所碩士論文 1985年）「研究編 第二章 免園策府的成書 第二節 操作時代」を参照。
- (6) 表1・2で典拠の欄に記載されている「墓誌」とは「徐州刺史杜嗣先墓誌」を指す。以下「墓誌」と称する。
- (7) この点に関しては、高橋氏が既に指摘しているように、『元和姓纂』巻六の杜氏の偃師の条に、「杜嗣光」という人物が記されており、彼の官職が「礼部侍郎」であることと、「偃師」出身であることから、「杜嗣光」という人物は「杜嗣先」を示し、「光」は「先」の誤りであろうとしている。なお註(5)郭長城前掲書「研究編 第三章 免園策府の流伝和作者 第二節 作者考訂 二 杜嗣先生平的假定」
- (8) この墓誌銘「大唐故黄門侍郎・兼修国史・贈礼部尚書・上柱国・扶陽県開国子韋府君墓誌銘并序 秘書少監・兼修国史・兼判刑部侍郎・上柱国・朝陽県開国子岑義撰 中書舍人鄭悝製銘」（神龍019）は『唐代墓誌彙編続集』（周紹良・趙超主編 上海古籍出版社 2001年）に収められているものによった。
- (9) 韋承慶の墓誌によれば、彼が雍王府参軍になったのは24歳の時であり、また彼が亡くなったのは神龍2年（706）11月19日で67歳であったことがわかる。したがって彼が雍王府参軍に任官したのは龍朔3年（663）年ということになる。しかし章懐太子李賢が雍王であったのは、『旧唐書』巻5・高宗本紀・下によれば、咸亨3年（672）9月から上元2年（675）6月までであり、10年ほどの開きがあり、墓誌の記述と矛盾する。恐らくは、墓誌の記述ミスであって、韋承慶は李賢が沛王の時代から仕えて、雍王となっても参軍として仕えたものと思われる。
- (10) 註(3)を参照。
- (11) 高若思については、『旧唐書』巻191・方伎伝・僧玄奘の条に「顯慶元年，高宗，又令左僕射于志寧，侍中許敬宗，中書令来濟・李義府・杜正倫，黄門侍郎薛元超等，共潤色玄奘所定之經，国子博士范義碩，太子洗馬郭瑜，弘文館学士高若思等，助加翻譯」と記されている。
- (12) 『新唐書』では本文のように『搖山玉彩』と記されているが『旧唐書』巻4・高宗本紀上・龍朔3年（663）2月の条に、「太子弘，撰瑤山玉彩成，書凡五百卷」と記され、また『旧唐書』巻190上・文苑伝上・孟利貞の条には、「[孟]利貞初為太子司議郎。中宗在東宮，深懼之。受詔與少師許敬宗，崇賢館学士郭瑜・顧胤・董思恭等，撰瑤山玉彩五百卷，龍朔二年奏上之，高宗称善，加級賜物有差」と記されていることから、この書名は『旧唐書』の記載に従う。ただこの書の成立年が本紀と列伝では1年のずれが見られるが、一応、本紀の記載に従う。
- (13) 註(12)を参照。
- (14) 杜嗣先の官職の品階に関しては、註(1)の高橋前掲論文p327を参照。
- (15) 註(2)礪波前掲書p122-8を参照。
- (16) 杜嗣先の才能については、墓誌に「少好經史，兼属文筆」とある。
- 補(1) 韋承慶は則天武后期の宰相韋思謙の子である（『旧唐書』巻88本伝）。

- 補(2) 『免園策府』に関して、後周の宰相馮道が、工部侍郎任賛に話をしている中で、免園冊は名儒が収集したものであると言っていることから(『舊五代史』卷126・馮道伝)、杜嗣先が当時の儒学者の著作を集めて編集したものである可能性もある。
- 補(3) 『免園策府』の特質について、註(5)郭長城前掲書「第一章 免園策府概説 第二節 免園策府的性質」に、「自撰式の別集」であり、対句・声律・典故を重視した「華麗で均整の取れた四六文」であると述べている。